カントの《Opus postumum》の哲学史的位置について

福谷　茂

カントの「遺稿（Opus postumum）」はその全貌が容易に見られる形態になってからすでに久しい年月が経過しているにもかかわらず、まだあまり研究のすすんでいない対象である。同じように公刊著作ではない「手書きの草稿 handschriftlicher Nachlass」のうちでも、いわゆる「レフレクシオーン」が、特に批判前期の思考のあゆみを復元するための資料として十分に活用されているのと比べると、この違いは目立つ。理由はいくつか考えられるが、「レフレクシオーン」はクロノロジカルに変転を追いつつ『純粋理性批判』への道を歩むという導きの糸があるのに対し、「遺稿」におけるカントの思考はそもそもどこに向かっているのかという点からして極めてわかりにくいという根本的な事情が作用していることは間違いがないように思われる。しかし、本来、「レフレクシオーン」はいわばメモであるのに対して、「遺稿」は著作のための準備であり、内容的にはより充実し、手ごたえを感じさせるものであるだけに、この状況の打開が必要であろう。本稿は、『純粋理性批判』と緊密に連関させることを通じて Opus postumum においてカント哲学の最終形態を認めるべきことを論証し、翻って『純粋理性批判』を中心とするカント哲学の解釈上にこの手稿がもっている大きな意義を示そうとするものである。

一

この手稿の形態や由来についてカント研究者以外には必ずしも十分な知識が共有されていないと思われるので、最初にこの点に関して簡単に触れておくことにしたい。周知のように、opus postumum[1]とは、「遺稿」あるいは「遺作」という意味の一般的な用語であるが、カントに関しては、具体的にはアカデミー版カント全集の第二一、二二巻の全体、計一二六〇ページを費やして収められていて、編集者によってこのタイトルを与えられた特定の手稿群を指す用語として使われている。この手稿群はまったく未整理のままであって、再構成するための手がかりとして一応カント自身のプランと見るべきものは残されてはいるものの、実はそれは雑多な内容の一部としか対応していない。大小さまざまな膨大な数の断片を組み合わせて復元しようとしても、どこから取り付くべきかさえも明らかでない点において、ほとんどパスカルの『パンセ』にも似た性格を持っているといえる。カントがなくなったのは一八〇四年であるが、この手稿がこの、Opus postumum というタイトルのもとに全貌がようやく日の目を見たのは一九三六年から三八年にかけてである。一三〇年余という、この異常な遅延の背後にあるなかなか興味ぶかい事情（所有者の頻繁な変遷と訴訟沙汰その他）については、アカデミー版の最終的編集者であるゲルハルト・レーマン Gerhardt Lehmann の序文に詳しく述べられているが、ここでは省略するほかない。[2]

手稿の形態は、大きな紙を八つ折りにして計一六面とした形態の原稿を、全体が一三の「コンヴォルート（Konvolut）」（封筒、束）と名付けられているグループに分けて収めたものであり、このグループは元来はそれぞれが内容的または執筆時期に対応していたと考えられているが、現状はまったく混乱していて、グループごとのはっきりした内容的統一をもってはいない（ただし、グループごとの性格の違いは認められる）。成立時期は一七九六年から一八〇三年までと推定され、特に一七九八、九九年に集中していることから言って、この点で実際に、七四、五歳、すなわち

晩年のカントの哲学的努力の現場を伝える貴重な資料であることだけは間違いないことである。

しかしもっとも興味がある点は、この草稿群の公刊がこれほどに遅れた理由の一つとして、そもそも、この草稿群がいったいどのような性格のものであるのかということについての認識が確立していなかったということがあるという事実そのものである。『パンセ』の場合、パスカル自身によって「キリスト教の弁証論」という明確な枠組みが与えられていて、性格と使命がはっきりしており、そのためパスカル没後数年でポール・ロワイヤルの人々は最初の版本を出すことができた。これに対して、Opus postumum 全体の性格付けに対する鍵はカント自身によってはそのような形では与えられてはいなかったのである。あるいは、もともとOpus postumum が、「キリスト教の弁証論」のような一般的な課題ではなく、もっとカント哲学そのものに固有な、特殊な課題を果たそうとするものであったために、鍵はカント自身によって与えられていたとしても、余人にはそれとして気付かれなかった、と見ることも可能だろう。Opus postumum はカント哲学をカントまでの哲学史と結びつけるためにおこなわれた努力なのであり、Opus postumum を抜きにしたかたちで完成形態として受け取られた『純粋理性批判』自体が源流となったそれ以後の哲学史の流れに身を浸しているわれわれにとっては、さしあたり理解しがたい使命を担っているテクストなのである。

カントの死後すぐに現れた最初の伝記がすでに、最晩年のカントの発言として、カント自身はその時点で自分が進めていた仕事を極めて重要なものと認識していたことを伝えている。ところが残された遺稿の実情は極めて混沌たるものであり、直ちにカント自身の発言を裏書するものとは言えなかった。したがって、Opus postumum の解釈と評価の歴史においては、クーノー・フィッシャーのように頭から遺稿の価値を否定する見方がまず台頭した。遺稿の公刊を志した人々も、このような見方には反撥しつつも、自らも決して手稿の内容について明晰な見通しを持っていたわけではないのである。例えば、アカデミー版以前にこの手稿を取り上げたハンス・ファイヒンガーは、まったく別の二冊の著作、すなわち、「自然学の形而上学的原理から物理学への移行」と「神、世界、人間に関する超越論哲学の最高点」という

二冊の書物を手稿から作り上げられるという前提をもっていたのである（「二著作説 Zwei-Werk-These」と呼ばれる）。

本稿のテーマは実はこの点、つまりOpus postumumにおけるカントの狙いは何だったか、という問題の確定と関係している。先述のようにわれわれは本稿においてOpus postumumがカント哲学においてもつ性格と使命を明らかにしてこの草稿のカント解釈上でもち得る意義を明らかにし、ひいてはその哲学史上の位置を確定したいと考える。そしてカントのOpus postumumは『純粋理性批判』と相俟って十分に哲学史上の位置を要求する資格を持っているテクストであることを明らかにしたいと考えるのである。

アカデミー版全集における全貌の公開が一九三六年から三八年にかけてである以上、Opus postumumの本格的な研究はそれ以降になるが、実は、その後も必ずしもただちに活発化したわけではなく、一九八一年現在で作成されたOpus postumumに関する研究文献の目録はわずかに五四点を含むに過ぎず、うち一九三六年以降分もわずかに二五点が挙げられているに過ぎない。(3)

しかし近年、ようやく事情が変わってきている。まず第一に、近年になって、この手稿の抜粋が外国語に翻訳されるようになっている。先鞭をつけたフランス語訳（一九五〇）およびイタリア語訳（一九六三）のあと、スペイン語訳（一九八三）、フランス語新訳（一九八六）と続いて、一九九三年には、ケンブリッジ版英訳カント選集の中で初の英訳が出版されている。(4) この事情を踏まえて、研究文献も各国において徐々に増加しつつある状況が生まれてきている。しかし現状を言えば、先に触れたようにこの手稿の性格付けというもっとも基本的な点に関してさえ、依然として共通認識ができているわけではなく、むしろ一番ホットな議論はこの点を巡っておこなわれている、という状況である。各国の研究者が入り乱れて基本的な問題に関してかなり水準の高い議論が繰り広げられているのが、Opus postumum研究の現段階である、と見てもよいだろう（以下、Opus postumumをOPと略称する）。(5)

まず、それらの研究動向に就いて簡単に紹介した上で、われわれが、なぜ、さらに別の観点が必要だと考えるのか、

論じたい。

二

この手稿の公刊がこれほど遅延した理由の一つとして、当初、その作業に携わった人たちが、この手稿の性格を臆断して、手稿中に繰り返し現われるタイトルのごときものの一つである「自然学の形而上学的原理から物理学への移行(der Übergang von der metaphysischen Anfangsgründe der Naturwissenschaft zur Physik)」を、この手稿全体をまとめるための鍵として利用した、そしてそれで押し切ることができなかった、という事情を指摘しなければならないだろう。

この種の解釈の代表者としては、著名なカント学者であるエーリヒ・アディケス Erich Adickes が挙げられる。アディケスはその著 Kants Opus postumum dargestellt und beurteilt (1920) においてアカデミー版全集以前に独自にこの手稿を調査し、内容を分析した。その成果であるこの大著ではもっぱらこの手稿中の自然哲学的な内容、すなわち、運動力 (bewegende Kräfte)、熱素 (Wärmestoff)、エーテル (Äther) といったテーマが重視されており、超越論哲学一般にかかわる内容を豊富に含んだ第一及び第七コンヴォルートは、それとは無関係に、自己触発 (Selbstaffektion)、物自体 (Ding an sich) 神 (Gott) といったテーマを批判期とは異なる角度から論じているものとして取り扱われている。そしてこの部分はアディケス自身の非常に特異なカント解釈である「二重触発論 (Doppelaffektionslehre)」という説の根拠を提供するものという読み方が提示されているのである。この二重触発論がカント解釈上、言わば樹を見て森を見ない解釈の代表例という位置を占めたので、アディケスがOPにおいてこれを読み取ったことは、OPに深入りすること自体が標準的なカント解釈のためには危険を招く結果をもたらすかのような先入見と用心を研究者の間に生んでしまったのである。

のみならず、このような扱い方の結果として、アディケスの書からわれわれが受け取る印象は、ＯＰの物理学にかかわる内容はまったく歴史的な興味しか有せず、また超越論哲学一般にかかわる部分は、それ自体として未完成であるのみならず、むしろ『純粋理性批判』の教説からのズレがもっぱら注目されるという結果をもたらしているということである。このような解釈がまず現れたことは、ＯＰをカント研究上の言わば困りものとして印象付け、研究者がややもすればＯＰを敬遠するという結果を生んだことは否定できないだろう。

同じくこのような、ＯＰにおいて自然哲学的内容を重視する立場の、近年最も重要な成果は、マイケル・フリードマン Michael Friedman の Kant and the Exact Sciences (1992) に含まれたＯＰ関係部分であろう。フリードマンは、従来先入見となっていたような物理学ではなく、意外にも化学の新しい成果、具体的には『純粋理性批判』以降に現われた、ラヴォワジェによる化学の体系化にカントが対応していることこそがＯＰにおいて注目すべき点であるということを実証的に論じている。物理学の場合に比べて、より新しい科学的成果をカントが晩年においてなお吸収し対応している現場を示すものとしてＯＰを捉えることができる、という点が彼のもたらした斬新な洞察である。ただしここでは、当然ながら、ＯＰと時代的にラヴォワジェの仕事に先立つ『純粋理性批判』そのものとの関係はまったく考慮されないことになる。ＯＰはカントの衰えない知的関心と粘り強い思考力を示すものではあるが、主著との関係がいかなるものであるかという点は問われないことになる。

他方、自然科学とは別の面に注目して、ＯＰ研究において戦後非常に早い時期に独創的な成果を挙げていたのがイタリアのヴィットーリオ・マチュウ Vittorio Mathieu である。マチュウはＯＰを関係付けるべきカントの著作は『純粋理性批判』ではなく『判断力批判』であると主張した（La filosofia trascendentale e l'《Opus postumum》di Kant, 1958）。すなわち、『判断力批判』において十分に解決を与えられていなかった、またカント自身もそう判断した有機体 Organismus の問題こそがＯＰの中核的なテーマであり、実際にＯＰはこの問題に関して『判断力批判』を超えた解決を

提出しているとマチュウは見るのである。マチュウの研究は一九八九年に独訳が出て、ようやく世界のカント研究者の間に広く知られるようになり、特にドイツ語圏でのＯＰ研究には刺激を与えている（Kants Opus postumum, 1989 及びそれに基づくイタリア語新版　L'Opus postumum di Kant, 1991）[5]。

そして今後標準的な解釈という位置を占めることが予想されるものとして、ケンブリッジ版英訳選集でＯＰの英訳を担当したエッカルト・フェルスター Eckart Förster の、Kant's Final Synthesis (2000) が挙げられる。この書はＯＰを扱った英語のモノグラフィーとしては最初のものである。彼は上記の諸解釈を踏まえつつ、ＯＰにおいてカントはたしかに比較的マイナーな特殊問題からスタートしたものの、それは時間の経過とともに自ずから、カテゴリーの演繹、時間・空間の本性、観念論の論駁、有機体を経て神の問題へと、超越論哲学全体の主要問題を考え直し、体系化することへと導かれたのだという解釈を提出している。この解釈によってはじめてＯＰをなんらかの特定のテーマを扱った著作のための準備及びその他の雑然とした寄せ集め、という伝統的な描像から解放することが可能となった。ＯＰの全体を満遍なく取り扱うことこそが自然な態度であることがここからは出てくる。今後はこれに基づいて、この研究を模範にして、ＯＰを、晩年のカントによる批判哲学の諸問題の、一応展開を終えた後の境地での、自由な再検討の結果を示す文書として、こだわりなく個々の論点に分解したうえで取り上げる研究が輩出することと予想される。

この解釈がもたらした自由な視点の持つ利点を承認しつつも、われわれはなお飽き足りないものを感じる。この解釈ではＯＰは言わばカント晩年の研究ノートに還元されているからである。ＯＰにおいて注目すべきはその「実験」的性格だ（トゥシュリング）、ということになる。これが現在のＯＰ研究の到達点を示す、もっとも進んだ見地だと見られるだろう。たしかに、ＯＰの実情は「カントは着眼点に基づき、多少構想を修正しながらいくつかの草案を試みている。しかしそのどれもが途中で途切れてしまう。だがカントは諦めない。また新しく筆を起こす。しかしそれも続かない。このようなタンタロスの苦しみを反覆していくうちに、さすがのカントも『人は私を子供として取り扱ってくれなけれ

ばならない』というほどに老いてしまう」、とわが国においてOPにもっとも早く注目した高坂正顕が描き出した通りであり、挫折した試みの集積である。[7] しかし、それはあくまでも、自分の哲学を体系化し、完成しようという書物のための準備労作なのであり、研究ノートとは性格を異にしているのではないだろうか。OPにおいて著しいのは、かつての研究者たちによってまず注目された自然学上の個別問題の具体化であると同時に、その正反対の方向への試み、すなわち、「超越論哲学の最高点」を突き止めようとすること、そのためのさまざまな試行錯誤なのである。われわれのOP解釈はこの点を充分に踏まえる必要があるだろう。自由に書き進められた研究ノートではなく、言いかえると、いまだ未知の素材を実験によって探求するラボラトリー段階を提示するものではなく、確固たる成果を踏まえた上で反復して試みられているその体系化と完成の遂行として、言わばパーツが組み合わされて完成品がはじめて姿を現わすアセンブリー段階という相のもとにOPを、しかもその微に入り細をうがった具体化の実行の跡をも捨てずに、捉える道が求められる必要があるとわれわれは考えるのである。

先に見たようにOPに関する諸解釈は、『純粋理性批判』との関係を捨象するか、もしくは、晩年のカントが一七八一年ないし八七年の所説からどのように偏倚していたか、という観点から捉えているかのどちらかであった。なるほど理論的に最も興味ある内容は『純粋理性批判』とかかわるテーマを扱っている部分であるというフェルスターの見解はその限りでまったく正当であると判断される。しかし、OPにおけるカントのそれらのテーマとのかかわりは再検討ではなく、むしろ、『純粋理性批判』の〈完成 Vollendung〉という観点から理解されるべきであるとわれわれは考えるのである。むしろ、そう理解したときにはじめてOP全体の性格が定まると考える。つまり、OPにおける、『純粋理性批判』と重なった論材は、再検討や再考ないし、フィヒテやシェリングなどの新しい世代の哲学との対話や影響という観点からではなく、『純粋理性批判』と一体化して、『純粋理性批判』がその方法的限定の故に説けなかった事柄を〈正面から〉ないし〈正式に〉、積極的に詳論しようとする試みであったという観点からこそ、活きてくると考えるの

である。

このようにして『純粋理性批判』という枠の中ではできなかった、しかし『純粋理性批判』の〈完成〉としてはようやく説くことがゆるされる段階を迎えた、ある〈構造〉とその〈構造〉によって可能になった事態が言わば主役となっていること、このことが、ＯＰの顕著な特徴である、その具体相における〈実在的なもの〉への動き、つまり、「自然学の形而上学的始原から物理学への移行」に典型的に現われている、「移行 Übergang」の問題全体の背後に据えられて理解されるべきであると考える。

カントの批判前期以来の重要なテーマとして、「形而上学に現実世界をいかにして持ち込むか」と表現できる問題がある。著作としては『負量の概念』（一七六三）や『神の現実存在の唯一可能な証明根拠』（一七六三）を挙げることができ、『純粋理性批判』においてはアンチノミー論に否定面が現われているこの問題に、超越論哲学の立場から最終的解答を与えているのがＯＰであり、ＯＰの課題はこの解答を行うことができる地点を超越論哲学の「最高点（der höchste Punkt）」として確定することにほかならない。「自然学の形而上学的原理から物理学への移行」を可能にするのは、この「最高点」であり、「自然学の形而上学的原理から物理学への移行」という特殊な移行を解決するためには、この最高点に遡ることが必要になるゆえに、ＯＰにおいては「最高点」の表示と具体化の徹底が、つまり抽象化と具体化の両極が同時に現われるのである。

三

以下、いくつかのケースを題材にして、この点を論じてゆくことにしたい。

まず、第一に、『純粋理性批判』とＯＰとがどういう関係にあるかという点から考えよう。

第一コンヴォルートには次のような断片が含まれている。

［第一コンヴォルート、第四ボーゲン、第四ページ］

I　神

理性は神の理念でなにを思考するか？

すべてを知り、すべてをなすことができ、善なることを欲する存在（最高存在）（最高知性）（最高善）最高の叡智。

定義

私が神の概念のもとで思考するもの。最高の完全性の存在。すべてを知りすべてをなすことができ、その自己意識のうちに人格性を含み（最高存在、最高知性、最高善）、他のすべてのものの製作者である存在。

スピノザ。すべての事物と自己を神において直観するというおそるべき理念は超越的であり、単に超越論的かつ内在的・客観的ではない（それ自体）。

問い。神と世界はともにひとつの体系を構成するのか、それとも両者の結合の理説が主観的に体系的なのか。

原則、定理、課題、そして帰結。

公理

神の概念は道徳的＝実践的理性の原理である。すべての人間的義務の認識を神の命令とみなすこと。

超越論哲学は理性における主観的なるものから、つまり、総合的原理の自発性から、理念によって始まる。超越論的観念論。

定理

人間のうちには活動的な、しかし超感性的な原理が存在し、この原理は自然と世界の因果性から独立して自然の

現象を規定し、自由と呼ばれる。[8]

この箇所はOPでは珍しくない様式の一例として取り出したものであるが、三批判書をカント哲学そのものとして考えることに慣れているものはかなりの驚きを感じる筈である。何より、言わば雰囲気が一変している。ここでは、端的に「神」という語がまず最初に表題として出された後で、定義・公理・定理というような、どの公刊著作でもカントが使ったことのない叙述のスタイルが採用されている。このようなスタイルはユークリッド幾何学風あるいはスピノザ風であり、実際にスピノザの名が登場していることは偶然ではないのだろう。ここでのスピノザの扱い方も後述するように非常に興味あるものであるが、まず注目すべきは、定義・公理・定理の内容そのもの、およびそれがこのような形式において述べられていることである。「最高知性」をはじめとする神についての定義自体は原則としてラテン語で持ち出されていることからもわかるように、極めて伝統的なものであると言える。ここにカントの独創性を認めることはできない。ところが公理及び定理として述べられていることは、「道徳的実践的理性」とか「活動的な、しかし超感性的な原理」という用語からも明らかなように、まったくカント哲学独自の見地に移行している。つまり、こちらでは『実践理性批判』ないし『単なる理性の限界内における宗教』と連続的な主張がなされているといえる。内容面では伝統的ないし、批判書を踏まえていて、形式面では面目を一新しているというこのOPの状況はなにをものがたるものなのだろうか。

まず、このように、まったく伝統的な定義とまったくカント的な概念とが連結されることの意味を考えることから始めたい。実はこのような連結がなされるところにこそ、すくなくとも試みられるところにこそ、OPというテクストのカント哲学上の位置あるいは使命を象徴的に読み取ることができるとわれわれは考える。つまり、この箇所の意味は、カントが「批判 Kritik」というタイトルをつけた書物においては使うことができなかった、言わば自ら禁じていた、端的な言葉、即ち「神 Gott」が使われているところにこそあると考える。この連結は、定義で述べられている平凡な、

言わば共有されているもの、具体的なものを批判哲学の理論的な概念で裏打ちすることにほかならない。それによって逆に高度に抽象的だった批判哲学が血肉を得るとともに、伝統的な共有されているテーマを自らもまた語ることが許されることになり、翻って、定義は批判哲学のうちにおいても活かされる場を持つことができる、ということがここでこのような接合を試みているカントの意図だとわれわれは考えるのである。こうしてＯＰとはまずKritikという作業が終わった後での、そしてそれを踏まえて初めて許されたところの、超越論哲学の具体化、あるいは〈現実への復帰〉が達成される段階を示すと言える。

これが内容面である。次に形式面の意味はなんであろうか。

このような幾何学的秩序をカントが採用していることは、カントが形式面からも、先に触れたようなＯＰの超越論哲学上の位置を鮮明にしようとしていることを示している。本来カントは哲学において数学的方法を模倣することを批判していた。これは批判前期から批判期を通じてかわらない。したがってここで突然幾何学的秩序に頼った叙述方式が採用されることは大きな変化を意味するようにも見られる。しかし、カントの数学的方法批判には前提があった。カントは批判前期、一七六三年の論文『形而上学と道徳神学における判明性の研究』において、哲学に数学的方法を持ち込むことを批判しているが、その際の前提もまた同時に明示していた。すなわちカントは、哲学は未だ幾何学的秩序による叙述の段階ではないということを強調していたのである。そしてここで幾何学的秩序にあたる言葉として使用されているのが、「綜合Synthesis」という言葉であり、未だそれに達しない現段階の哲学に固有の方法として対比的に用いられているのが、「分析Analysis」にほかならなかった。[9] そして両者は二者択一ではなく、対を成して完成すべき二つの段階としてカントでは考えられていたのである。

『純粋理性批判』という書物そのもののうちにも、カントがこのように、批判をあくまでも準備作業として考えていたことを示す箇所を見出すことは困難ではない。KritikとMetaphysik（NaturとSitte）という対比で語られている

箇所もあれば、Analysis と Synthesis という対を借りていることもあり、Propädeutik と System という言葉が使われることもあれば、さらには dogmatisches Verfahren（この場合は Dogmatismus との対比で）が形而上学にとって必然的な方法として推奨されることもある。つまり、OPにおけるこのような幾何学的ないし総合的な方法の採用は、大きな変更であるどころか、『純粋理性批判』そのものにおいて、また『純粋理性批判』そのものによって、あらかじめ予定され、志向されていたことなのである。

四

それでは次に、超越論哲学におけるこのような〈転回〉を可能ならしめるものは何か、という点について考えよう。OPを理解するうえでのヴァイタルな点が、OPを、全体として捉えたカント哲学のいかなる段階において成立しているテクストであるのかを把握することであるとするならば、次の問題は、件のOPが成立する段階をどこととして同定するかということになる。そしてそこがふたたび『純粋理性批判』と表裏一体をなすことが示されねばならない。その点を示しているテクストにはことかかないが、代表的なものをひとつ引用する。

定立

ただひとつだけ可能である経験の対象において外感の普遍的な客観が存在するのであり（Es existirt ein allgemeines Objekt äußerer Sinne an dem Gegenstande Einer allein möglichen Erfahrung）、諸経験（複数で）について語られる場合、それは諸知覚の集積（Aggregat）を意味するに過ぎない。諸知覚は、一なる経験の全体のうちにおいて理性概念によって（それゆえアプリオリに）一なる経験に対する（zu Einer Erfahrung）その多様の統一の形式的原理にしたがって汎通的に自己の元で結合されているものと思考されるゆえに、（物質の運動諸力そのものに関する）与えられた表象の結合の形式の主観的原理は質料（これらの運動諸力そのもの）に先行する。

客観的にはただひとつの経験のみが存在し（es ist objektiv nur Eine Erfahrung）、すべての知覚は、諸知覚の絶対的全体という捏造されたのではなく与えられた体系のうちにある。(10)

「定立 Thesis」として、外観の一般的客観は唯一の可能的経験の対象において存在する、という命題が据えられている。そしてそれに続く部分では、諸経験と複数があり得る意味での「経験」はいまだ経験といわれる資格をもたず、実は単に諸知覚の集積にほかならないという注意がされている。このように、〈勝義の経験は唯一的であり、個々の知覚とは区別されねばならない〉という論点はＯＰ全体に渡って、しかもつねに根本的事実という資格を与えられて、夥しく登場している。カントはこの点を強調するためにほとんど常に、経験の前に冠せられたeineという語を大文字のEineにしている。にもかかわらず、この点が従来は体系化志向が表に出てくるＯＰ固有の特殊な論点であるかのように取り扱われ、それがもつカント解釈上のポテンシャルが認識されていないのである。

『純粋理性批判』においてはeineを大文字にするという措置は取られていなかった。なぜならばこのことは『純粋理性批判』においては未だdogmatischに前提することができる段階ではなく、反対に、その事実が分析によって逐次発見されるべき事柄であったからである。そして『純粋理性批判』において、実際にこの事実は発見されており、その資格においてすでに充分に語られている。たとえば、『純粋理性批判』第一版の演繹論では、「唯一の時間と空間が存在するように、唯一の経験が存在する」A110と言われており、さらに「知覚の全面的で総合的な統一がまさしく経験の形式を形成する」と言われるとき、すでに経験と知覚との区別がここでおこなわれていることが確認できるとともに、この区別が、超越論的統覚の発見に至る、いわゆる三段の総合を受けてその探求が見出した事態として位置付けられ、カテゴリーの演繹がそこからスタートすべき位置だとされていることを知るならば、この区別の果たす役割の重要さという点においてもすでにＯＰと同じであることがあきらかである。のみならず、この命題はすぐに「唯一の可能的経験一般のアプリオリな諸制約は同時に経験の対象の可能性の諸制約である」という命題へと展開され、さらにすぐ続けて、

カテゴリーの演繹そのものに対する方針が、カテゴリーとは「唯一の可能的経験における思考の諸制約にほかならない」（「唯一の可能的経験における in einer möglichen Erfahrung」はゲシュペルト）という言い方で表現されていることを確認するならば、一七八一年においてもカントは充分にこの事態の持つ言わば「公理」的な位置を自覚していたことが明らかなのである。逆に、『純粋理性批判』においては文脈に埋没することも可能な、そして現行の邦訳では特別の場合を除き、特に訳出する必要すら認められていない eine という言葉に、重要な、むしろ論証上決定的な意味がこめられていることを遡って確定するのが、ＯＰにおけるこの dogmatisch な大文字の用法である、という関係がＯＰと『純粋理性批判』との間には成立している。

実はこのような意味での「唯一の経験」は、そのような問題意識をもって精査するならば、『純粋理性批判』において、原則論や弁証論にもかなり頻繁に登場しており、さらに、原則論と弁証論ではその役割が転換しているという、ＯＰと比較することによってさらに興味ぶかくなる事態さえも起っている。つまり、演繹論や原則論では、「唯一の経験」はカテゴリーや原則を内在化して取り込むための原動力であり、反対に弁証論では仮象（神という仮象に関して）を経験から弾き出すための梃子となっている。そして、先に見た ens summum という伝統的な神の定義がまさしく『純粋理性批判』の弁証論の、同じ「超越論的理想」章において、現われている。ただし、ここでは仮象として、その形而上学からの弾き出しとその仮象としての成立の所以が説明されねばならない概念として、つまり言わば敵役として、現われている。したがってこの点からは、『純粋理性批判』の弁証論を裏返しにしたものがＯＰにほかならない、ということができよう。言い換えると、仮象ではなく、正しく解釈された事態が、ＯＰにおいて正面から取り上げられているのである。

このようにして、先に見た、ＯＰという段階を可能にするもの、つまり、「綜合」としての、dogmatisch な段階を可能にする転回点は、ＯＰで大文字で書かれている「唯一の（可能的）経験」であると見られるのである。そしてこれ

はさらにOPにおける今ひとつの課題であり特徴でもある、〈現実性への超越論的接近〉（カント自身の言葉でいうと、「移行」）というテーマへと展開してゆくことになる。

五

この問題を見るために、別の箇所を見ることにする。

実在は汎通的規定だ existentia est omnimoda determinatio とクリスティアン・ヴォルフは言う。そしてそのようにして同値的な概念の関係として、逆に、汎通的規定は実在でもある。(11)

カントはこのラテン語の命題、というより、その主述逆転命題、すなわち「汎通的規定は実在である omnimoda determinatio est existentia」をOPにおいて多用している。ヴォルフが言う、もとの命題の意味は、実在するのは個物であり、個物が個物であって一般者ではないのは、複数のものに当てはまる一般者とは違って、個物は、自己にしか当てはまらないように完全に、残るくまなく限定されていなければならない、ということであるが、カントはOPにおいてこれを逆転して、「完全に規定されているものは実在する」という形にしたのである。その上で、〈汎通的に規定されているもの〉の概念をアプリオリに構成することができるならば、それが同時に存在していることをも主張できる、というのである。言い換えると、カントはここでは概念から存在を演繹できると主張しているのであり、「存在はレアールな述語ではない」と言い、存在論的証明を否定した批判前期及び『純粋理性批判』のカントとはまったく別人の観がある。これもまた『純粋理性批判』こそカントだと捉えているものにとってはほとんど衝撃的な主張ではないだろうか。

ところで、なぜそういうことが言えるのか、そうなるのか、という根拠が次の論述に示されている。

しかしながら、この思考された全面的規定は与えられ得ない。なぜならば、それは無限な経験的規定へと拡散する

からである。どのような経験からも導出されず、むしろ経験自体を可能ならしめる、可能的経験の唯一の対象という概念においてのみ、外官の対象に対して総合的にではなく同一律に従って分析的に客観的実在性は、この全面的規定を必然的に認められるのだ。[12]

つまり、汎通的規定が客観的実在性を意味するという考え方はヴォルフ流の形而上学が考えている概念的な形態においては成立しえず（批判前期からの一貫したカントの批判点）、可能的経験とその唯一の対象というカントの考えにおいて初めて〈汎通的に規定された概念〉というものをアプリオリに樹立できるのであって、従ってその概念から分析的に、言い換えると、演繹的に、客観的実在性を導出できるということにほかならない。汎通的規定という概念をヴォルフの場合のような論理学的意義から全体的経験への個々の諸経験の内在という意味に言わば換骨奪胎することで、カントは、広く受け入れられた、したがってでき得ればリサイクルを図るべき由緒あるラテン語命題を、自己の哲学を語るための武器として取り返すことができたのである。[13]

では、〈可能的経験とその対象が全面的に規定されていて、その存在を分析的に導出できるものである〉ということはいかなることであろうか。

それを教えるのが、「公理 Axiom」と題された別のある箇所である。

公理

主観的に見られるならば、ただひとつの外的経験が存在する。なぜならば、ただひとつの空間が存在するからである。

空間を占有したり充たしたりする物質の諸運動力は相互に普遍的な動的結合のうちにあり、客観的にそれらの体系を構成する。この体系は経験的に経験から成立するのではなく（nicht empirisch aus der Erfahrung）、アプリオリに一なる経験の概念から（a priori aus dem Begriff der Möglichkeit Einer Erfahrung）成立する、諸運動力の一

なる絶対的全体の現存在をすでにその概念のうちに含んでいる。[14]

ここでは、空間を占有しあるいは満たす物質の運動力は相互に普遍的動的結合関係を持ち、客観的に一つの体系をなしていること、および、この体系は経験的に経験から生ずるのではなく、アプリオリに〈「一なる経験」の可能性〉の概念から生じ、諸運動力の唯一の絶対的全体の現存在を既にその概念のうちに含んでいる、と言われている。

言い換えると、ここで運動力の体系の概念のうちに含まれているとされる現存在、つまり客観的実在性はさらに「一なる経験」の可能性にリンクされており、それによって保証されているとともに、逆に「一なる経験」の可能性は「物質の諸運動力」の相互的な動的結合関係として具体化されているのである。可能的経験とその対象が全面的に規定されているということは、このことにほかならない。

この点もまた、実は、『純粋理性批判』においてすでに確定されていたことである。すなわち、先ほど引用した第一版の演繹論の箇所において、「ただ一つの経験が存在する」という事態を説明してカントは「ただ一つの経験においては、すべての知覚が全面的で法則的な durchgängig und gesetzmäßig 連関をなすものとして表象される」A110 と付け加えていた。この事態が『純粋理性批判』では原則論、特に「知覚の類推」としてさらに具体化されたが、その具体化の度合いが最終的に達した段階が、OPにおける「物質の運動力の体系」にほかならない。

そしてこのOPの段階でカントは、上述のような『純粋理性批判』では言わば implicit に語られていたことを〈可能であるものが、その可能であるあり方の力によって、同時にその実在性を分析的に導出され得るのだ〉、という論理として提出しているのである。これはもちろん『純粋理性批判』ではそれとして正面からは説き得なかった論点である。しかしまた、この論理は「存在はレアールな述語ではない」を含めて、『純粋理性批判』の全行論がそれを目指していたものであることもまたあきらかである。『純粋理性批判』が結論として持ち、しかしあくまでも含意するにとどめるほかなかった論理を今や正面からのべたものにほかならないのである。

先に引用した箇所の少しあとには次のような箇所がある。ラテン語で、〈可能であることから存在へと帰結すること は有効である a posse ad esse valet consequentia〉と書かれた上で、これはここで、またこのケースだけ言いうること だと念を押しているのである。[15] 普通、人口に膾炙しているのは、〈可能であることから存在を帰結することは無効である a posse ad esse non valet consequentia〉というこれとは逆の意味の命題であり、この逆命題はごく常識的な、言わば陳腐な命題であるに過ぎない。したがって、ここでも、同じような、カントによる常識的な定式の意図的な逆転が衝撃と挑発をもたらしているのであり、その支えとなっているのは、「可能である」という場合の、その「可能性」のあり方がここではすでに超越論化されていることである。すなわち、「可能である」ことはここでは、もはやもとの定式の場合とは違って、個々の事象に関してケース・バイ・ケースで語られることではなく、一切の現実的なものの前提であるという意味と位置を持たされている。つまり、遡れば、『純粋理性批判』において確定された、超越論的演繹とその成果、つまり超越論的演繹の水準にまでリンクが届いているということによって、この逆転が言わば体系的に支えられているのである。A posse ad esse valet consequentia とは、『純粋理性批判』以来の超越論哲学の論理自体が、synthetisch に、つまり「綜合」の見地から見られた時に取る〈正式の〉形態であるにほかならないのである。

そしてこのような〈OPの段階における超越論哲学の論理〉を集約的に示している、今ひとつのラテン語表現が、「forma dat esse rei（形相がものの存在を与える）」というラテン語である。[16] この表現もまたスコラ以来の共通財産ともいえるものであるが、（しかし典型的にはスアレス以後とされている）、[17] カントはやはりOPでこれを全面的に活用している。もちろんカントでは forma はもはや「形相」ではなく「形式」であって、超越論哲学の営為は『純粋理性批判』以来、理論哲学・実践哲学の両面において、さまざまな「形式 Form」の洗い出しにあったということができる。この場合の形式は一般的に、『純粋理性批判』の「反省概念の多義性」の章でも詳論されているように、可能性の制約という役割を果たし得る、つまり、質料に先行し得る「形式」である。経験の可能性の制約が同時に経験の対象の可能

性の制約である、という『純粋理性批判』で繰り返される根本命題で言う、「制約Bedingung」が具体的には「形式」にほかならない。具体的には、直観の形式としての空間と時間、思考の形式としてのカテゴリーがそれである。

『純粋理性批判』の段階では、対象の可能性の「制約」として、言わば遡って分析的に突き止められた到達点という地位で現われるほかなかった「形式」が、OPの段階では、先ほどから見てきたような意味での〈逆転〉がおこなわれて、出発点という役割において現われ得るということが、forma dat esse rei という命題のOPでの大活躍を説明する。言い換えると、この命題は、事態としては、『純粋理性批判』のあの有名な命題と同じことを、ただし逆方向から述べたものに他ならないのである。

そしてOPが『純粋理性批判』と表裏一体をなし、したがって『純粋理性批判』の構造と狙いをより明晰ならしめるものであるというその役割をよく示しているのは、OPにおける「形式」のあり方である。ここでは『純粋理性批判』の場合のように、一つずつステップを追って感性の、あるいは思考の、「形式」が取り出されてゆくのではなく、言わば一気に「形式」そのものとして語られていた。

しかし、特定の認識能力の形式ではなく、形式そのものとは何であろうか。われわれの見方では、OPこそはそれを語ることが可能な段階なのである。のみならず、実はこのような、つまりOP的な、「形式」の捉え方が『純粋理性批判』の遣り方に対して持つ優位性すらも認められねばならないのである。

この点を、具体的に『純粋理性批判』流の遣り方がそのやり方の故に生み出す難点として指摘される或る点を取り上げることによって考えてみたい。すなわち、『純粋理性批判』では、直観の形式と思考の形式がそれぞれ独立して取り出される結果、両者がどう関係するのかという言わば二次的な問題が生じ、そこで両者の媒介のために図式論Schematismusという章が窮余の一策として挿入されねばならなくなった、というような理解と批判が存在している。[18]

これによると、『純粋理性批判』では、感性の形式と悟性の形式がそれぞれ単独に、また、まったく別個に取り出され

て積み上げられる観を呈しているので、まず、あたかも直観の形式のみで対象が与えられるような印象を与えてしまうのに、すぐに思考の形式としてのカテゴリーが演繹されて、結局、第二の形式もまた加わってはじめて対象の成立があるように考え直さねばならなくなり、第一の形式の意味がぼやける、というような批判が加えられることになる。

ＯＰの遣り方ではこのような難点と批判が生ずることはない。ＯＰでは直観の形式も思考の形式も、先ほど来の意味での「唯一の（可能的）経験」のうちに言わば溶かし込まれていて、結局のところ、究極の形式という役割を、forma dat esse rei のformaとしての、この意味での「経験」が果たさざるを得ないからである。対象の可能性を制約するその形式という、言わば論理的関係が、ＯＰではそのformaが「唯一の（可能的）経験」であり、ここの経験はそのうちに包括されるという、言わば存在論的な構造に展開されているのである。そして『純粋理性批判』が〈分析〉という方法で目指していた目的地も実はこの構造の解明にほかならない。〈分析〉的に、論理的な制約関係が次々と積み重ねられ、したがって積み重ねられた諸形式間の媒介という問題がさらに現れるという論理学的な事態ではなく（図式論！）、全体としての経験が個々の経験を言わば一気に制約するという存在論的な事態として、『純粋理性批判』の狙っているもの、つまり「経験の可能性の制約が同時に経験の対象の可能性の制約である」という関係が、ＯＰではまったくストレートに語られているのである。

六

こうしてわれわれは最後の論点にたどり着いた。

スピノザの超越論的観念論に従うならば、われわれは自己を神において直観する。定言命法は最高の、命令する、私の外なる実体を前提としない。それは私の理性のうちにある。[19]

このわずか三行の断片は非常に注目すべき内容を含んでいる。さきほどから見てきたようにＯＰの主役である〈一な

る経験〉はその個々の経験との関係から言えば、スピノザ的実体とその属性ないし様態との関係を強く示唆するものであることは明らかである。カントは公刊著作においては当時危険思想家と見られていたスピノザの名を出すことには極めて慎重であったが、ここでは、はっきりと「スピノザの超越論的観念論に従うならば、われわれは自己を神において直観する」と言われている。そのあとでの、「定言命法は私の外にある至高の命令する実体を前提せず、私の理性のうちに存している」とあわせて考えるとき、われわれはカントとスピノザの関係をカント自身の眼を通して知るのである。

カントは明らかにスピノザ的実体との接近を自覚している。そうでなければ、「スピノザの超越論的観念論」という表現は出てくるはずがないだろう。そのうえで、しかも、スピノザ主義はカントにとっては先に引用した箇所での言及に現われているように、「万物と自己を神において直観する」ものとして「おそろしい」考え方なのである。神への直接的な包摂、神のうちへの個物と人格の融解、これはなんとしてもカントが受け入れることが出来ないものであった。従ってスピノザへの接近が同時に要求するのは、スピノザのこの面の回避にならざるを得ない。

カントはどのようにして回避したのだろうか。

先ほど来引用を重ねてきたフレーズは「一なる経験」ないし「唯一の経験」、および「可能的経験」だった。

鍵は「可能的」にある。なぜ、わざわざ「可能的経験」とカントは言うのだろうか。カントは唯一の経験が個々の経験をうちに含むその仕方がスピノザ的な仕方、すなわち、直接的な、いうならば逃げ場のない実在的な包摂関係になることを回避するために、件の「唯一の経験」に対し、「可能的」という様相を与えたのである。可能的経験は、実在的にではなく、正に可能的に、しかも存在するのである。そしてこのような存在の仕方が有り得ることにこそ、「形式」が質料に対して先行的に有り得ること、つまり、「アプリオリな綜合判断」の存立の成否がかかっているのである。「アプリオリな綜合判断」の必然性と普遍妥当性はこの根源的な可能性によって支えられているのである。この意味で、「可能性」という様相の根源化がカントの企図にとって、いいかえると超越論哲学そのものの成否にとって、決定的な

ものであったことを確認することができるだろう。個物と人格をレアールな実在する実体の様態 Modus に貶めることなしに、しかも、「形式」としての全体、つまり「可能的経験」のうちへと予め内在させること、ここにこそカントの哲学的努力が存したのであり、そのうえで、「神」そのものはあくまでも「実践理性」の媒介を経てはじめてわれわれにとっての対象となるという点で、カントはスピノザに接近しつつも、スピノザとは一線を画することが出来たのである。OPにおけるカントのスピノザへの接近はスピノザの全一的実体と類比的であるものがカントの超越論哲学の究極にも見えていたことをわれわれに教える。カントはOPにおいてまさしく形而上学の歴史に自らを位置付けたのである。

ではそのような形而上学の世界がなぜカントの最終目的地でなければならなかったのか。

それは、この形而上学の世界が一つの制度であり、言わば公共の場であるからである。批判のあまりにも独創的なネオロジズムの独我論的世界から、手垢の付いた、しかし共有される世界へとカントは敢えて歩み出たのである。その凡庸性と手垢の付き具合において、形而上学の世界はすでに共有された、共通語の世界である。カントは自分の固有語を翻訳して、共通語の世界へと出ようとしたのである。カントは理解されることを求めたのである。

カント哲学の最終形態としてカント自身によって最後まで追求されたのは、スピノザのゆるぎない体系性に範を仰いだ「学」のための基盤としてスピノザ的実体に類比的なものを自己の立場において手中に収め、しかもそれを伝統的な、つまりもっともありふれた学的公用語を用いて語ることだった。[20] カントは三批判書期の独創性をそのまま哲学史という公共の場において誰にでも理解され得る言葉で語ろうとしたのである。

こうしてカントのOPはカントを哲学史の系譜のうちに新しい仕方で位置付けることになるのである。OPの含むさまざまな問題のうち、われわれに関心がある部分としてもごく一部に触れえたに過ぎないが、本稿はここで筆を置くことにしたい。

注

(1) 因みにスピノザの『エチカ』は、最初、Opera posthuma というタイトルを持つ書として、その他の著作と共に出版された。言い換えると、この種のタイトルは完成した著作をも指し得るものである。なお、カントの手稿群に対して Opus postumum という命名を行ったのはファイヒンガーである。内容の完成度の高さをファイヒンガーが評価したためだと思われる。

(2) Akademie-Ausgabe Bd. 22, S. 751-789. 以下アカデミー版カント全集からの引用に関しては巻数とページのみを示す。

(3) Nota bibliografica, in Vittorio Mathieu (a cura di), Kant. Opus postumum, 1984 による。

(4) フランス語新訳は、François Marty、イタリア語訳は Vittorio Mathieu によるものである。なお、Félix Duque によるスペイン語訳は次注に挙げたブラントの論文で非常に高く評価されているものであるが、今回は参照できなかった。

(5) このような研究の進展のなかで当然ながら、アカデミー版全集のOPの編集に関して厳しい批判が提出されている。特に、注(6)に挙げた論文集に寄せられたラインハルト・ブラントの論文 Kants Vorarbeiten zum Übergang von der "Metaphysik zur Physik". Probleme der Edition を参照 (S. 1-27)。ブラントはOPという呼称そのものに異を唱えている。しかし、マチュウは同意していない (Vgl., Vittorio Mathieu, "Prefazione all'edizione italiana", in L'Opus postumum di Kant, p. 12)。ブラントの提案は、結局、ファイヒンガー以来の Opus postumum というタイトルの付与自体をミスリーディングなものと見なして、手稿群から Übergang von der Metaphysik der Natur zur Physik にかかわるものだけを純化抽出すべきであるという内容である。これに対し、アカデミー版の編集方針は、全コンヴォルートの中身をそのままのかたちで印刷するというものだった。ここでも、パスカルの『パンセ』の編集史を思わせる事情が現われている。Vgl., Louis Lafuma, Histoire des Pensées de Pascal (1656-1952), (Paris, 1954)。

(6) マチュウの書の出版がひとつのきっかけとなって一九八九年一〇月に開催された Opus postumum に関する研究会の報告が、Herausgegeben von Forum für Philosophie Bad Homburg, Übergang. Untersuchungen zum Spätwerk Immanuel Kants, 1991 として出版されている。

(7) 「高坂正顕著作集」第二巻跋「著作集第二巻について」(一九六四)。

(8) Bd. 21, S. 50.

(9) この点に関しては「一七六五―一七六六年度冬学期の講義内容予告」が非常に興味深く、また明晰である。Vgl., Bd. 1, S.

309.

(10) Bd. 22, S. 591.

(11) Bd. 21, S. 600.

(12) Bd. 21, S. 600.

(13) この汎通的規定の考え方がカントの周辺では広く受け入れられていたことに関しては、Giorgio Tonelli, Elementi metodologici e metafisici in Kant dal 1745 al 1768 (Torino, 1954), p. 154 が実例を挙げて論証している。

(14) Bd. 22, S. 610.

(15) Bd. 21, S. 591.

(16) Bd. 22, S. 552.

(17) Mario Gaetano Lombardo, La forma che dà l'essere alle cose (Milano, 1995) はこの命題を手がかりにしてスアレス、ライプニッツ、カントという系譜を探り当てている。

(18) これが最も全面的に展開されているのは、岩崎武雄のカント解釈及び批判である。私はカントを『純粋理性批判』に即して読む限りにおいて、このような批評がおこなわれるのはむしろ当然であると考える。問題は、それが『純粋理性批判』という書物の採用した方法が言わば不可避的にもたらした制約であって、それらの不整合があまりにも目に付きやすいことは、カント自身によってもまた自覚的におこなわれていることを示唆する、という観点の必要性である。カント自身がOPにおいて整合的に考える観点を準備していることをわれわれは論じてきたのである。

(19) Bd. 22, S. 56.

(20) 実はこのようなカントの努力は『純粋理性批判』においてもすでに開始されている。この書におけるカントのターミノロジーに関しては、すでにトネリがカントはあえて遡って一七世紀のアリストテレス主義的形而上学の述語を大量に採用していることを指摘している。例えば、Kategorie, transzendental, Analytik, Dialektik などがそうである (Vgl., Giorgio Tonelli, "Das Wiederaufleben der deutsch-aristotelischen Terminologie bei Kant während der Entstehung der Kritik der reinen Vernunft", in Archiv für Begriffsgeschichte, IX, 1964, pp. 233-242)。

(筆者　ふくたに・しげる　京都大学大学院文学研究科助教授／西洋近世哲学史)

mental states is likely to be actively based in the left DLPFC in HSS.

Über den philosophiegeschichtlichen Ort des *Opus postumum* Kants

by
Shigeru FUKUTANI
Associate Professor of the History of Modern European Philosophy
Graduate School of Letters
Kyoto University

In der Literatur über das *Opus postumum* Immanuel Kants herrscht weitgehend Ratlosigkeit. Die Aussagen von augezeichneten Forscher sind konträr und unvereinbar (z. B. Vittorio Mathieu, Reinhardt Brandt und Eckart Förster).

Aber stimmen bisherige Interpretationen darin überein, daß das *Opus postumum* sei eine Fortsetzung der kritischen Philosophie in ihrem Fachgebiet (*Metaphysische Anfangsgründe der Naturwissenschaft* oder *Kritik der Urteilskraft*), d. i. metaphysica specialis. Der Verfasser dieses Aufsatzes vertritt dagegen eine Ansicht, daß das *Opus postumum* ist die eigentliche Vollendung der kritischen Philosophie, d. i. metaphysica generalis.

Die Absicht dieser Ausführungen geht dahin, das *Opus postumum* Kants aus dem Gesamtkontext der neuzeitlichen Metaphysikgeschichte auszulegen und auf diese Weise das, was er für ein genaueres Verständnis der kantischen Philosophie beiträgt, in seiner Eigenart deutlich werden zu lassen. Aus diesem Grunde der Verfasser versucht die Endgestalt der kantischen Philosophie zu rekonstruieren, die als synthetische Metaphysik auftreten können.